

タイにおける貧困問題と
ストリート・チルドレンに関する研究

学位論文内容の要旨

1) 論文の構成

第Ⅰ部 問題の所在と調査方法	
第1章 問題の所在	1
第2章 分析視角と調査研究の方法	29
第Ⅱ部 ストリート・チルドレンに関するネットワークの分析	
第3章 タイにおけるストリート・チルドレンの生存戦略 ーピア・グループのネットワーク分析	114
第4章 マージナルマンとしてのストリート・チルドレン ーストリートでのライフヒストリーと社会ネットワークに関する分析	138
第5章 NGO とストリート・チルドレンに対する繋がりを形成する戦略	154
第Ⅲ部 援助的ネットワークの役割と NGO の活動	
第6章 ストリート・チルドレンのための社会復帰支援の成功 ー元ストリート・チルドレンの事例に見る NGO 活動の役割	184
第7章 タイにおける子供の問題と行政・NGO のサポート ーストリート・チルドレンに対する行政・NGO のサポートに関する事例研究	205
第8章 結論と今後の課題	236
参考資料	
参考文献	

(400字詰め原稿用紙約 1129 枚相当)

2) 本論文の観点と方法

従来、タイの貧困問題は、東北部の農村や北部山地民における低開発の問題か、地域の商品経済化に伴う農民層分解、都市部への労働者移動に伴うスラムの増加が主たる問題であった。しかし、1990年代以降、タイは経済のグローバル化に適応して急速に発展し、2003

年の高等教育機関への進学率が40%を超えるほどに中間層を増大させた。その一方で、発展から取り残された人々の社会的排除は深刻化している。タイのストリート・チルドレンとは、市民生活を送るために必要な教育機会や社会生活から排除された典型的な人々である。彼等は、物乞いを行う貧困層の子供達というよりも、出稼ぎにより地方農村に置かれたままの子供達が家出したり、都市部の機能不全家族から逃げ出したり、或いは、人身売買組織により買い集められた子供達である。男女問わず、少年期から売買春や麻薬売買に巻き込まれ、青年期にはヤクザ組織の手先になるか、軽犯罪に手を染めて生きる糧を探すことになる。タイの社会教育政策にとってストリート・チルドレン対策は解決が急がれる課題なのだが、十分な施策がなされないまま、問題は深刻化している。

そこで、ストリート・チルドレンを社会復帰させるために、NGOがどのようなソーシャル・サポートを行えるかを実証的に検証しようというのがスチャリクル氏の研究目的である。本論では、タイの地方中核都市であるチェンマイ（北部）、コーンケーン（東北部）、プーケット（南部）の3都市におけるストリート・チルドレンの実態調査（ストリート・チルドレン30名、元ストリート・チルドレン4名、NGOのスタッフ8名への面接調査）と、各都市で活動するNGO組織（Volunteer Group for Child Development, YMCA Foundation, World Vision Foundation, Child Help Foundationの4団体）の支援事業を事例とした。

3) 本論文の内容

第1章では、タイの近代化・開発政策の下に貧困問題の様相を探るべく、先行研究をレビューしている。タイの児童問題、ストリート・チルドレン問題をタイの調査研究をもとにまとめ、次いで、フィリピンやブラジルなど他地域のストリート・チルドレンとの比較対照を行った。

第2章では、調査方法と調査概要について述べ、対象地、対象団体、対象者のデータを概観した。各地域において、ストリート・チルドレンになる経緯は、少数民族への社会排除的政策や経済構造、出稼ぎ者の家族問題、観光産業による消費文化の蔓延等、子供達がストリート・チルドレンとなる契機が異なることが明らかにされた。

第3章では、タイにおけるストリート・チルドレンの生存戦略として、彼等がピア・グループのネットワークをどのように使いながら生活の糧を得たり、他のギャング集団から身を守ったり、警察等の摘発を逃れたりするのかが描かれた。ストリート・チルドレンにとって、食物、お金、情報、助けは彼等相互のネットワークからしか得られない。家族や地域社会、NGO/行政から得られるのであれば、もはやストリート・チルドレンの状態を脱している。

第4章で述べるマージナルマンとしてのストリート・チルドレンとは、まさにこれらの社会関係を取り結んでいないことから自分たちの生活に必要な資源を調達できないことを指している。分析では、2人のストリート・チルドレンについて、彼等の社会圏にどのような人々がたち現れ、彼等が仕事をしたり、遊んだり、必要な情報や機会を得るためにどのチャネルを使っているのかがネットワーク分析により明らかにされた。

第5章では、NGOがストリート・チルドレンを社会復帰させる過程を分析する。NGOはストリート・エデュケーターと呼ばれるスタッフを盛り場や子供達が集まる場所に派遣して、新しい子供が加わっていないか、子供達がケガしていないか等の見回りを行う。そして、徐々に子供達と顔見知りになり、知り合いとしての弱い紐帯を取り結んでから、親しくなった子供をNGOの施設によんで研修プログラムを受けてみないかと勧める。スタッフや教師と強い紐帯が形成された子供達に対しては、公立校への受け入れを依頼したり、簡単な作業の仕事を斡旋したりする。そうして子供達が学校か職場に居場所を確保し、後見人ができたものについては、不測の事態が生じたような場合に相談に来るようにいって、NGOは子供達との紐帯をゆるやかなものに変えていくのである。

第6章では、ストリート・チルドレンのなかで社会復帰に成功した事例を取り上げ、彼らがストリートを離れることができた要因、ストリートでの生活を止める前と止めた後の変化などを、彼等の回顧談から分析する。

第7章において、タイの児童・青少年問題、特にストリート・チルドレンへの対応を、行政・NGOによるソーシャル・サポートから分析する。現時点では、行政によるサポートは殆ど期待できず、国際援助NGO傘下にあるタイNGOや福祉団体によるソーシャル・サポートが全ストリート・チルドレンのごく一部に支援事業を行っている段階である。NGOによるノンフォーマル教育の実践を紹介し、教育前後の子供達の変化を詳しく分析する。実際のところ、NGOが提供するプログラムによってストリートを離脱できる子供達は対象者のごく一部であることも同時に示される。

第8章では、結論と今後の課題がまとめられている。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 櫻 井 義 秀
副 査 准教授 樽 本 英 樹
副 査 准教授 祖 田 亮 次

学 位 論 文 題 名

タイにおける貧困問題と ストリート・チルドレンに関する研究

1) 本論文の研究成果に関わる所見

①タイのストリート・チルドレンに関する研究は、首都バンコクの調査研究が主であり、チェンマイとプーケットには幾つか先行研究があるものの、コーンケーンでは初めての調査である。3地域の地域的特性（民族文化、経済階層、観光産業相互の関連）を踏まえてストリート・チルドレン出現の経緯と彼等の生活実態を克明に調べている点は、地域研究としても十分に評価できるものである。そして、NGOがストリート・チルドレンへいかなるソーシャル・サポートを行っているのかを調査し、社会復帰へのプロセスを丁寧に叙述している点も社会開発論の調査研究として参照に値するものだろう。

②スチャリクル氏がストリート・チルドレンの生存戦略として、彼等がグループ内外でどのような社会関係を形成し、問題解決のためにそれぞれのネットワークを利用しているのかを明らかにした点も、社会関係の分析手法として評価されるものである。しかしながら、ネットワーク分析として3章、4章、5章を執筆しているが、いわゆる便益性からのみ社会的ネットワークを捉える傾向がある。ストリート・チルドレンはいわゆる社会的地位や役割、ましてや資産を持たないものであるため、自らが調達不可能な便益を、自分が保有するネットワークを通して得るわけである。しかし、その反面、ネットワークを維持するコストとして、相手に対する便益の供与、とりわけ年少者が年長者から庇護や仕事の斡旋を得るためにはグループ内で与えられた役割を果たさなければならない。そこにはストリート・チルドレン独特の用語法やふるまい方の習得、地域の顔役との繋がりなど、ストリート・チルドレンの社会復帰を極めて困難にすることも生存戦略として選択されているのである。NGOはこの強固なしがらみにメスを入れ、一般社会との繋がりを再構築するべく、最初にNGO組織のスタッフや教師をネットワークの中心に位置づけようという方策を地道に行うが、生活保障の力がないために多くのストリート・チルドレンにとって利用できるネ

ットワークの一つにとどまっているのが実態である。こうした諸点を部分的には詳細に描いているのだが、ネットワーク論の枠組みで全体のプロセスを説明しきるところまでには至っていない。

③このような理論的弱さは事例の特徴に由来するところも大きい。つまり、ストリート・チルドレンとは年少のストリート・ギャングに等しく、彼等の活動時間、すなわち夕方から深夜にかけて街の盛り場やアンダーグラウンドな場所で活動するものである。彼等の生活実態を参与観察し、彼等と共に生活しながらエスノグラフィーを行うことは、女性研究者にとって極めてリスクが高い。従って、NGO から紹介された対象者に事務所でインタビューすることになるが、具体的な問題解決のために彼等がどのようにネットワークを用いて活動するのかをダイナミックに描き出すことはやはり難しかった。回顧的なライフストーリーやエピソードから全体を構成すると、類型的なストリート・チルドレンにならざるをえない。しかしながら、博士論文としては、難しい調査対象に果敢に挑み、資料的価値のある調査研究を成し遂げたことを評価すべきであり、理論的な詰めや調査法の工夫は今後の研究生活において成し遂げてもらうべき課題とするのが適当と考える。

④本論文の各章は、第1章、第2章の一部が『北海道大学大学院文学研究科 研究論集』6:337-354 (2006年)、同5:311-331 (2005年)、第3章が、査読雑誌『タイ研究』6:165-179 (2006年)、第4章が、査読誌 Journal of Graduate School of Letters 2:103-116 (2007年)、第7章が、査読誌『現代社会学研究』20:55-71 (2007年) に掲載されており、博士課程在籍4年間で、査読雑誌論文3本はスチャリクル氏の研究水準を示すものと考えられる。

2) 学位授与に関する委員会の所見

以上の審査結果から、本審査委員会としては、全員一致で本申請論文が博士(文学)の学位を授与されるのにふさわしいものであると認定した。